

東京理科大学の実力主義とは

東京理科大学 学長室

第1節 実力主義の源流となった東京物理学校の精神

およそ150年前の明治の初めには、日本には東京大学の他に理学を教える学校はありませんでした。理学はまだ極めて限られた人たちにしか教授されていない学問だったのです。そのような時代に、東京大学理学部仏語物理学科で学んだ青年たちが志を一つにして、自分たちで物理学の学校を創立しようと立ち上がりました。その学校こそが東京物理学講習所（のち東京物理学校と改称）です。今日の日本の科学技術立国としての礎は、彼らの先見の明によって築かれたと言っても過言ではないでしょう。

彼らは、故郷（藩）または国から手厚い支援を受け、エリート教育を受けていることに、並々ならぬ恩義を感じていました。国家の近代化を進めるためには理学は必要な学問であることを固く信じ、自らの報恩の証を理学普及という形で残したいと考え、一致団結したのです。

しかし、理学の普及を標榜して東京物理学校を創立したものの、経営は極めて厳しいものでありました。文系の学問とは異なり、実験や観測を伴う理学の学校を創立し維持していくことはかなり困難な時代でした。21名の創始者たちは皆、立派な本職がりましたが、経営を支える余力はありませんでした。当初は、他校の学舎に間借りし、昼は本職があるので夜学にしました。彼らは、本業を終えた夕刻に無給で教壇に立ち続けました。これが東京物理学校の1881年の始まりです。

私学の多くは一人の偉人によって創立されていますが、東京物理学校は平均年齢25歳の若者たちによって創られた**類い稀なる大学**なのです。彼らの考えや精神を要約すると、次の3点に絞られます。

1. ノブレスオブリージュの精神

先端の学問を受けた者としての責務、すなわち、才ある者は率先して困難な仕事をやり遂げるべきであるという信念を持っていました。

2. 科学に対する先見の明と進取の気性

当時は、法学や政治学、経済学や実業、語学等の学問が幅を利かせており、科学の重要性を理解する人はごく少数に限られていました。そのような時代の中で、日本が独立した国家であるためには科学の普及が基本であると、未来を見据えていました。それが東京理科大学の学是（建学の精神）の中に取り込まれたのです。

3. 科学的思考と実力主義

日本を発展させるためには、自然や社会の事象を科学的な眼で観察し、未見の原理や本質を見抜き、応用する真に実力を備えた人材を育成することが大切であると考えていました。

第2節 東京理科大学が標榜する実力主義とは何であるか

本学を象徴する言葉のひとつに「実力主義」があります。実力主義は建学以来、脈々と引き継がれて、現在に至ります。

そもそも、**実力主義**とは、「縁故、財力、生い立ちや経歴、年齢に関係なく、その人物がもつ意欲や能力（実力）こそが一番大切である」という考え方にに基づきます。

東京理科大学の使命は、“社会に貢献する実力”のある人間を育てることだと考えられてきました。

なぜ、東京理科大学に実力主義が根付いたのでしょうか？それは主に次の2つの理由が考えられます。

1. 万人に公平に教育のチャンスを与え、力をつけた者だけを卒業させるという創始者たちの信念があったから

“万人に公平に教育の機会を”という創始者の思いは、たとえば、寺尾壽先生の“東大勤続25周年の祝賀会での言葉”に、見てとることができます。そこでは、藩校で学問の才の誉れ高かった少年期に父を亡くし、学問の道から一旦離れざるを得なかった頃の心情が語られています。その頃の自分と同じように、学問への志を抱きつつも、境遇によりその機会を得られず、社会の中で働いている人々にも理学を学ぶチャンスを、という寺尾先生の切実な思いを感じとることができます。

東京物理学校開校以来、1943年度までは入学者定員を定めず、入学試験を課さず、意欲ある者全員に門戸を開いてきました。そのため、年齢、経歴、家柄、貧富に関係なく、志願してきた人を全員入学させ、その上授業料は特別に安いものでした。また、夜間の学校であることも特徴で、現在の理学部第二部（夜間学部）にこの伝統は引き継がれています。

このように、入学の機会は広く与えましたが、その一方で、実力がついた者だけを社会に送り出す責任を全うするという方針は譲りませんでした。そのため、教育の充実を図る一方、関門制度が設けられるなど、進級や卒業は必然的に厳しくせざるを得ませんでした。その結果、卒業生のいない年度もあり、また、学内には学生たちが落第しないように祈願する“落第神社”もあるくらいでした。

2. 理工系学問の特性、すなわち、理論構築と応用への階層性は実力がなければ突破できないから

東京理科大学は東京物理学校開校以来、他大学と異なり、理工系の学問だけを教える大学でした。理工系の学問の特性は、たとえば、数学に顕著に見られるように、理論が階層的な構造をしており、あるところで躓くとその先が全く理解できないものになっています。理論的基礎を正確に理解しない限り先には進めない、そのため、確かな基礎力を身につけることが最優先とされたのです。そして、理論的基礎を正しく身につけることによるのみ、理学による自然現象の解明と工学による社会実装が可能となり、ひいてはそれが新しい産業の誕生に繋がる、この理工系学問が持つ階層性の大切さを、今日に至る本学の教育と研究の歴史が物語っています。

第3節 次代にむけ東京理科大学はどのような実力を育成すべきか

教育には、時代を超えた普遍的な目的・目標があります。しかし、巡りゆく時の流れに応じて変えていかなければならない内容もあります。それに伴い、世の中から必要とされる実力の中身も変化していくでしょう。

時代の変化をも踏まえ、東京理科大学で育むべき“未来を拓く実力”は、次の精神と能力です。

1. 高い志とノブレスオブリージュの精神

幅広い教養、正しい倫理観を備え、社会が求めるものに対して使命感を持って応える努力を惜しまず、人々の幸せや社会の発展・持続に率先して寄与する精神

2. 高い専門性と科学的思考力

高い専門性ととともに、その構築で培った論理的思考力とエビデンスにもとづく科学的思考力

3. 独創性と進取の気性

混沌とした自然や変化する社会の中から新たな問題を感知し、独自の視点で物事を捉え、柔軟な思考によって新しい学問領域やイノベーションを創出する力

4. 共創力

グローバルで高度に専門化した社会において、多様な人々と積極的に交わり異質な考えや能力を持つ人々と互いに長所を認め合い、専門分野の壁をも乗り越えて共創できる力

東京理科大学は、教職員が協働して、より一層の教育の充実を図り、未来を切り拓く学生を育て世に送り出していきます。

2021年3月1日